

みそしへ

第十一号

〔編集発行〕

鳥取県教育関係

神職協議会事務局

題字 永江則英氏

(元鳥取県神社庁長)

全教神協 第十二回中国ブロック 研修会に参加して

鳥取県教育関係神職協議会顧問

東小鹿神社 宮司

川上 寛史

令和五年八月十九日(土)～
二十日(日)の二日間にわたり、
標記の研修会が松江温泉「ホテル
白鳥」で開催された。

参加者は合計二十一名。本県か
らは細谷会長、岡村吉彦氏、私の
三名が出席。

開催県の会長の廣江直澄氏の挨拶に続き、角河和幸鳥根神社庁長の挨拶があり、そのうち講演会に入る。

『お神酒について』直会は神様との共食の場』と題して石原美和氏の講演を聴く。先生のプロフィールは様々だが、鳥根県のご

出身。山陰中央テレビ放送に入社。現在フリーで司会、ナレーションを中心に活躍中。日本酒の魅力に見せられ、鳥根県内の酒造元

をすべて探訪、『しまね酒楽探訪』を刊行、二年後『とっとり酒楽探訪』を発行。日本酒に関する記事

多く、お酒にご造詣が深い。お酒と神とは切り離せないもの。水と米とだけでできているお酒。神に献上し、おさがりを頂く、神と人

とのつながり。人と人をつなぐご縁のお酒。お酒の神様、平田市の「佐香神社(松尾神社)」の神事についても触れられ、酒の話は

尽きるところなし。人をして飽きさせぬ。

講義終わりでおよそ一時間、五県の連絡会あり。全教神協常任理事の岡村吉彦氏を司会に、先ず参加者一人一人が自己紹介。のち各県の現状報告あり。共通しているのは、会員の高齢化・現職会員の少なさや職場の忙しさ、会の参加者の固定化などである。解決は容易ではないが、会員の発掘と教神協の外へのアピールも必要であろう。

夜に入り懇親会あり。この場に



も講演者の石原氏が参加してくださる。女性会員二人と合わせ三名となり、場は華やぐ。特記するのは、この懇親会のために各県で推薦すべき酒を持参。石原氏の指導の下で、利き酒会。テーブルに置かれた各県の名酒を当てるというもの。一回目は各県の会長の争い。

全酒正解は岡山県会長の小坂氏。二回目は希望者による利き酒。当県からは岡村氏が挑戦。さすが酒の聖、全酒正解で見事に優勝。鳥取県、面目を施す。二次会もあり。ここにも石原氏参加してくださる。とても気さくない人なり。

翌日八月二十日。猛暑の中「佐太神社」に正式参拝。三棟並ぶ中央の「正中殿」の玉垣内で参拝。本殿を間近に拝する。右隣は北殿、左隣が南殿。三棟とも大社造りだが、南殿だけは、全く逆の構造となっている。

参拝後、境内左手に建つ「舞殿」にて全会員「悪切り祈禱」を受ける。ここは冷房あり。祭壇には五色の御幣を立てた神籬が置かれ、末座の四人の神楽の音色心地よき



中、烏帽子に赤のクスギ鉢巻にし、陣羽織の衣装を身にまとった舞人一人立ち現われ、剣を抜きて、四方を祓う。時に悪魔祓いの呪文を唱え、太鼓打つ者これに応える。舞うこと三十分ほど、舞人の汗も滴る。会員、悪を逃れ、神のお蔭を十二分に蒙り満足げ。

終わりに朝山宮司から話を伺う。DVDで出雲大社・万九千神社とも関係深い神在祭・神等去神事・竜神などを拝見して理解を深めたが、時間の関係で佐太神社独

特の御坐替祭のDVDとその話を見聞くことができなかったのは残念であった。

この後、この場所にて、閉講式あり。廣江氏の挨拶の後、修了証授与式。そして次回開催県である鳥取県の細谷会長の挨拶あり、めでたく島根大会は終了したのであった。

会員の皆様には、鳥取県大会の多数の参加を期待しております。



第六十二回全国大会・中央研修会に参加して

副会長 岡村 吉彦

令和五年七月二十八・二十九日、福島県郡山市の「郡山ビューホテル・アネックス」を会場に、第六十二回全国教育関係神職協議会全国大会・中央研修会が開催された。

今回の主題は「神道精神に根ざした真の日本人を育てるために」。昨年までの四年間は「輝かそう日本人の誇り、正そう日本の教育」を主題としてきたが、「実践」に重きを置いた研修会にしようという方針のもと、新たな主題下での開催となった。

参加者は七十七名。実践を重視した研修ということもあってか、例年に比べて現職会員の参加が多かったのが印象的であった。

一日目。開会式典・総会の後、産経新聞客員論説委員の湯浅博氏が「米中派遣争いと日本の覚悟」と題して基調講演をおこなった。

湯浅氏は講演の中で、中国の近

年の動向に触れ、日本国内の土地購入が進んでいることを憂慮する一方で、米中冷戦の構図は、近年の中国経済の減速やグローバルサウスの台頭により崩れつつあるとして、インド太平洋の枠組みの一層の重要性を指摘された。

講演に続いて分科会が開催される。「教育現場のために何ができるか」「神社（社頭）において何ができるか」「氏子・崇敬者のために何ができるか」の三つのテーマをもとに六グループに分かれ、それぞれの会場で実践報告や意見交換が行われた。この分科会は中央研修会の柱と言えるものであり、この分科会があってこそ全国から会員が集まって研修会を開催する意味があると感じている。

今年は第二分科会の報告者を担当させていただいたが、参加者が様々な実践を持ち寄って、成果や課題を発表し合い、活発な意見交



換がなされた。多くの気づきと学びを得られた有意義な時間であった。

分科会後は懇親会。福島県教神協の皆様のご厚意により、県内各地の銘酒が提供され、福島県の郷土料理に舌鼓を打ちつつ、全国の同志と親睦を深めた。余興も素晴らしく、とても楽しい時間であった。

二日目。会場から徒歩五分のところに鎮座する安積国造神社に正式参拝。澄んだ空気のもと、清々しい気持ちで参拝させていただいた。

会場に戻り、福島県立博物館長の

赤坂憲雄氏による記念講演。赤坂氏は日本を代表する民俗学者であり、二十代の時に読んだ同氏の著者『東西／南北考』は、今でも私の座右の書の一つである。そのため、同氏の講演を拝聴できることを、大会前からとても楽しみにしていた。

同氏は、明治十年にキリスト教布教のために日本を旅したイザベラ・バードの旅行記をもとに、異人がみた日本の文化・神道のあり方や日本人通訳者との宗教論争について紹介された上で、「バードはキリスト教を布教しようと日本に来たが、日本人の神道的思想のもとで欧米の宗教を広めるには時間がかかると語っていた」ことを紹介された。

その上で、日本が欧米の植民地にならなかつた理由として、「神道という日本人特有の宗教観が確実にあった」と結ばれた。「異人」「多様」という赤坂哲学の真髄ともいえる視点から近代の日本人の精神世界に迫った中身の濃い講演

であった。

記念講演後は全体会があり、昨日の分科会の報告を行った。次いで閉会式典があり、大会宣言を採択して、全日程を終了した。

二日間の研修会であったが、私自身、多くの学びがあり、とても充実した時間を過ごさせていただいた。素晴らしい大会を開催していただいた関係者の皆様に改めて感謝申し上げたい。

菅原道真公大宰府左遷の旅

—全教神協第十一回中国ブロック研修会より—

会長 細谷 博高

菅原家は、中から下の位の貴族で学者の家柄、幼少より秀で、詩歌を好んでいた様です。政にも精通し、時の醍醐天皇に右大臣（公卿）に抜擢され、大出世を遂げます。これを妬む左大臣藤原時平の謀により、大宰府に左遷されてしまします。

『叙位一百韻（じょいいいっぴゃくいん）』

これは、道真公が左遷の命を受け、大宰府へ行く道中の危険や屈辱、到着後の宿舎の荒廃や生活の自由、大宰府役人の腐敗、中国の故事や老荘への思い、自然景観の描写、自らの生涯の追憶など、道真公の怒り無念と悲嘆とが詠われた二百句（行）の五言古詩です。ここでは、省略させてもらいます。詩歌を好まれたからこそ詠まれた



のでしよう。

簡単な現代文にすると、真に随行する老僕はいつも、杖にたすけられて、長い道を疲れた足を引きずってしたがってくる。車につけた疲れたそえ馬には、何度も鞭を加えて歩かせる。宮城の門を遠望して、これが見納めかと思うと、眼も穴がうがたれる思いであった。我が泣く声のために、ほととぎすの啼き声をさえ中断させる。

宿駅では、手入れの行き届いた馬に取り代えず、蹄の破れた疲れた馬で、駅舎を見送った。(一行には食物と馬を供給してはならぬと官符が出ていた。)

港でも、一行に食事や船を給してはならないとふれが出ていたので、艦の半分毀れかかった様な破れ船が近づいて来て迎えた。郵亭(文書を伝送するために人馬を更迭する場所)も余すところ五十。宮司が言われるに、此処に到着する度に『都から、この命は間違いだ。都へ帰られよ。』の書状が届いていないかと期待し、そして裏切られながら大宰府へと進ま



れて行かれたとの事。そして、防府天満宮に到着。此処が本州最後の地、期待する書状は遂に来ず、いよいよ九州へ船で渡る時、道真公の無念落胆、屈辱の思いは如何程であったか。
大宰府到着の様子から。(歌の途中を省略)
城内の右郭のほとりて停止し、永い旅の末に到着。官舎の小さな門を開いた辺りに、何事かと覗き込む者が南北の道一杯になる。民衆の好奇の目にさらされて護送される。その度毎にむかむかして、嘔吐してもやっぱり胸がむかつ

く。脚もよたよたとして足なえの病かかったようになる。ああ何と、いう哀れさかな。

以下省略。余談、行程には説が幾つかある様です。
(大会資料より引用)

岡村吉明名誉会員が浄階・特級昇級

この度は、岡村吉明名誉会員(前鳥取県神社庁長)におかれましては、浄階になられ、更に極僅かな間に特級に昇級されましたこと、ただただ敬服するばかりです。

うこと。
そして、私たち会員にとって大変誇りに思い、名誉に感じ、会員皆で慶びを分かち合おうという思いがあったからであります。

改めて、遅ればせながらも会員一同よりおめでとうとございます。心よりお慶び申し上げます。特級昇級のお祝いの席に参列させていただいたとき、初めて特級の袴を拝見させて頂きました。白地に紋の入ったもので、「ほー。これが特級の袴か。」と、見入った程でした。浄階で特級となりますと、もうこれ以上の階位、級はありません。本当に、おめでとうございます。本当に、おめでとうございます。通り越しているのではないのでしょうか。

最後に、誠に意を尽くせませんでした。これからも健康には十分留意され、お元気で、神明奉仕、地域に貢献されますことを申し添えて、お慶びの言葉と致します
(会長 細谷博高)

令和六年 第十三回全教神協中国ブロック大会（鳥取大会）について

来年（令和六年）の第十三回全教神協中国ブロック大会は鳥取県で開催されます。

現在、役員・事務局を中心に企画立案を進めているところですが、準備・運営にあたっては、多くの会員の皆様のお力添えが必要となります。何卒、御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。現時点での企画案は以下の通りです。

○期日

令和六年八月二十四日（土）・二十五日（日）

○研修会場

米子市文化ホール

○正式参拝

大神山神社（米子市尾高）

○宿泊先・懇親会会場

皆生温泉「三井別館」

○参加費

二万円程度

○日程（案）

下記のとおり

○その他

- ・当日午前中に鳥取県教神協総会を開催します。
- ・令和六年三月頃に役割分担をお示ししますの
で、何卒よろしくお願いいたします。

日 程 (案)

	8月24日（土）	8月25日（日）
7:30		
8:00		朝食
8:30		移動（マイクロバス）
9:00		正式参拝（大神山神社）
9:30		講話（60分）
10:00		
10:30		
11:00	鳥取県教神協総会	ブロック連絡会（60分）
11:30		閉会行事
12:00	昼食・会場準備	移動・解散
12:30		
13:00	受付	
13:30	開会行事	
14:00		
14:30	講演会（90分）	
15:00		
15:30	県連会長会	
16:00	移動	
16:30		
17:00	チェックイン・入浴等	
17:30		
18:00		
18:30		
19:00		
19:30	懇親会	
20:00		
20:30		

鳥取県教育関係神職協議会 会員（令和五年度）

会 長	細谷 博高	賀茂神社（元教員）
副会長	中嶋 盛浩	国信神社（元教員）
理 事	岡村 吉彦	賀露神社（鳥取東高）
	河野 光男	河野神社（鳥取工高）
	岡村 吉隆	賀露神社（県教委）
	福田 恭子	照國神社（元学校事務職員）
	御船 齋紀	國坂神社（元教員）
	中嶋 俊史	老宮神社（元教員）
監 事	船越 寛明	神奈川神社（元教員）
	鷺見 寛幸	日吉神社（大山町教委）
	池山 宣昭	柴尾神社（大山西小）
会 員	池山 圭吾	柴尾神社（元教員）
	太田 貴能	逢坂八幡神社（岸本中）
	永江 重弥	倭文神社（倉吉西高）
	山本 育朗	熊野神社（奥大山江府学園）
	鳥谷 学	賀茂神社（鳥取緑風高）
	戸板 正哉	新宮神社（県教委）
	福田 靖	照國神社（倉吉養護学校）
	池本 圭一	龜谷神社（大山西小）
	河合 巧圭	葦原神社（倉吉養護学校）
	岸本 栄	立見神社（元教員）
	長谷部 正人	聖神社（元教員）
	大坂 芳郎	北野神社（元教員）
	湯浅 秀志	東郷神社（元教員）
	永江 吉邦	倉田八幡宮（元教員）
	熊沢菜穂子	高杉神社（元教員）
	上屋敷明美	白尾神社（元教員）

顧 問

河合 鎮徳	葦原神社（平成十七年度より会長）
川上 寛史	東小鹿神社（平成二十一年度より会長）
岡村 吉明	賀露神社（平成五年度より会長）
池本 一悠	武宮神社（平成九年度より会長）
湯村 正明	湖山神社（平成十三年度より会長）
河野 光男	河野神社（鳥取工高）
岡村 吉隆	賀露神社（県教委）

全教神協常任理事

岡村 吉彦（令和四年度より）

編 集 後 記

「みをしへ」第十一号をお届けします。前回の発行から一年以上経ってしまいました。中には原稿をお寄せいただいたにも関わらず、発行が遅れたために、掲載時期を逃してしまい、見送らざるを得なかった方もいらつしゃいます。心よりお詫び申し上げます。誠に申し訳ありませんでした。

本文中にもありますが、来年八月には鳥取県が幹事県となつて、第十三回中国ブロック研修会が開催されます。細谷会長を中心に会員一同力を合わせて、充実した研修になるよう取り組んでいきたいと思ひます。御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

コロナが落ち着き、神社・学校・地域の活動も復活しつつあります。一方で情報化・少子化など教育現場を取り巻く環境は厳しさを増しています。多忙な毎日ではありますが、現職・元職を問わず、教職と神職という二足のわらじを経験している我々だからこそできることもたくさんあると思ひます。自分が神社・学校・地域で子ども達や氏子の方々に対して何ができるかを考え、しっかりと実践していきたいと思ひます。

（岡村吉彦）